ウニ類

水族館へ行こう！

64

京都大学白浜水族館

宮崎 勝己

体に何がある？

ウニの体には棘（とげ）がある。これは誰もが知っている常識である。しかしウニの体にあるのは、棘だけではない。白浜水族館の217号と218号の水槽では、よくガラス面にウニが張り付いている姿を見掛ける。しかし、つるつるしたガラス面に、棘を使って張り付いているとは考えにくい。ではウニは、何を使ってガラス面に張り付いているのか？

答えは、張り付いたウニをつぶさに眺めるとすぐに分かる。棘の間から管足（かんそく）と呼ばれる触手のようなものがたくさん伸びている。その先端が吸盤状になっていてガラス面にぴったり張り付いているのだ。

ウニの体中には、他の棘皮（きょくひ）動物と同じく、水管系と呼ばれる特殊な器官が発達している。管足には水管系とつながる細い管が伸び、その中の海水を出し入れすることで管足が伸縮する。

白浜水族館で展示しているウニの中では、棘が短いシラヒゲウニや移動能力の高いガンガゼなどの管足が観察しやすい。管足はウニの体全面に一様に分布しているわけではない。管足が出る部分は上から見ると五つの帯となっており、これはウニなどの棘皮動物の体の基本的なつくりである「五放射相称」を反映している。この管足が出る帯の部分を「歩帯（ほたい）」、管足が無い帯の部分を「間歩帯（かんぽたい）」と呼ぶ。

ウニをさらによく観察すると、細い柄を持って先が膨れた別の構造物に気付かれるだろう。これは棘が変形したもので、叉棘（さきょく）と呼ばれる。叉棘の先端部は三つまたに分かれており、はさみのように開閉する。体表や棘、管足の汚れを取り除いたり、敵に対する防御に使ったりする。叉棘は本来小さく、見つけるのに苦労するがラッパウニの叉棘は例外的に大きく発達しているので、その様子が肉眼でもよく分かる。

普通のウニで叉棘を観察する場合は、口の周りに比較的多く集まっているので、まずはそこに注目するとよいだろう。

（京都大学講師）

ラッパウニの棘と管足、叉棘（水槽番号403）